



奥

出雲町立高尾小が来月をもって閉校になる。高尾小ばかりでなく、かつて十校以上を擁していた奥出雲の小学校は、二〇二六年度には二校となる。ぼくが勤務していた二〇〇〇年代初めの十数年も児童数の減少は明らかだったが、こへきて加速した感がある。

高尾小学校に赴任したのが十二年前で、極小規模と言われながらも全校児童が十人以上はいた。それから年を追うごとに一人、二人と減っていき、閉校となる今年二〇二五年度は三名である。

この欄にはしつこく書いてきたので、改めて書くまでもないのだが、高尾小学校は、その十二年前に始めた落語を減っていく児童数をどこ吹く風とばかりに維持続けた。

しかし、ついにそれも閉校と同時に終わる。先日、高尾小学校から案内が届いた。そういうことなら行ってみよかと思われる向きもあるかもしれないので、日時などあげておく。

・日時 三月一日(土) 午後一時三十分開演、終演予定午後四時。

・場所 奥出雲町立高尾小学校体育館

・出演 高尾小学校児童三名、にここ寄席応援団、さらに特別出演として三遊亭楽麻呂さん。

・入場無料だが、申し込みが必要で、電話は〇八五四一五四一九〇三〇、古澤教頭まで。

なお、天気次第だが三月でも寒いときは雪が降り水が張るほどなので、防寒対策は必須である。

ぼくが今、落語教室で子どもたちと相對していられるのは紛れもなく高尾小学校のおかげであるから、十二年分の感謝の思いを抱いて当日は学校に向かうつもりだ。

さて、出演にある「にここ寄席応援団」とは、先生と子どもの漫才ユニット、高尾小落語家OBに加えて、我が落語教室生も含まれる。この子は、奥出雲とご縁浅からぬこともあって、二歳の時から家族といっしょに「にここ寄席」に度々来ていた。年に数度であつても三年四年と通えば、自然と落語が体に馴染む。そして自分もやりたくなつて入塾に至り、今では長尺のネタをいくつも持つまでになつてゐる。つまり、ぼくと同じく落語について言えば、高尾小学校に育てられたようなものだ。

閉校と言え、地域の人にとつて絶えるというイメージが抜きがたくあるだろうが、そうとばかりは言えない。心を込めたものは時空を越えて飛び火する、とスーザン・ソングが説いたように、一つの希望を教室生に見る人もあるだろう。

老い老いに

木幡智恵美

23



九九七年の四月から私が連載したのは「わんぱく物語」。今年が年男である二男のわんぱくぶりを綴った。娘が「宗には困るわ」と、二男のことをよくこぼすが、「宗ちゃんなんか可愛いもんだわ。雄二が宗ちゃんくらの時は、そんなもんじゃなかった」と、いつも比較に出されるのが我が二男。職員旅行に連れて行った際、「雄二君、命がいくつあつても足りないね」と言われるくらい、崖に上り、淵を歩き回り、ひと時もじつとしていなかった。その連載が終わる頃から始めたのが「沖繩平和ツアー」。夏休み前、平和ツアーの企画を耳にした。ただの観光ではなく、平和学習の旅だ。中学生の娘はすんなり納得してくれた。息子たちにも説明はするが、どこまで分かっているやら。まあ、飛行機に乗って、南国気分が味わえる沖繩というところに身を置くだけでいいかと親子五人での参加を決めた。

三家族を含め総勢十五人のツアー。実際に行つてみると、あまりに濃厚な時間で、書き残さねばならないと思つた。真つ暗な壕(ガマ)の中で聞いた衝撃的な話は今でも耳の奥に残つてゐる。広大な基地では戦闘機がタッチ&ゴーを繰り返す。そこが見える丘の一面に追いやられて暮らす地元住民たち。基地を取り囲むのは猛毒を有するという夾竹桃、防衛庁が張り巡らしたフェンスの中で不気味に佇む象の檻、反戦地主一さんの牛舎で聞いた話……

行く先々で頭が重くなるような話を聞く一行の中に、我が子含め子どもが六人。大人の都合だけで引き回すのは可哀そうだと三日目には海遊びが入れてあつた。「え、ここハワイ？」と言つたのは二男と同年のT君。早い時刻の海水浴で、ビーチは貸し切り状態。そこで丘やドカリを集めたり、島に上がったたりして沖繩ならではの一時を過ごし、子どもたちは大満足。大人たちも飽和状態の頭を休めることができた。前夜、ひめゆりの証言を涙して聞いた娘も、那覇の街中をバスが走ると、「沖繩アクターズスクールつどこにあるかなあ」と呟く。憧れのスターたちが育ち、芸を磨かれた地にいることに満足しているようだ。

旅が終わる、子どもたちに感想を書かせると、わんぱく坊主はこう書いていた。「びゅーとおとがしてせんとうきがきました。どんどんおとが大きくなつてきました。でも、うしはむしみたいにもうもうといつてきいていませんでした。うまものです。ぼくはふしぎだとおもいました」。

30代フリーター フェイク情報が本物の情報と同等に流通し、選挙を左右するまでになった。インターネットでなくても情報を発信できるようになった、ネット上で広告収入を稼ぐためのセンサーショナルな記事が増えた、SNSは事実よりも「信じたい情報」が広がりやすい仕組みになっている、といった理由があげられている。年金生活者 これまで言葉と物（事実）は対応しているのが当然と思われてきた。それが当然ではなくなったことがそれらの背景にある。

ミシェル・フーコーは『言葉と物』で、一体をなしていた言葉と物が離れていくさまを、西欧のエピステーメ（認識の枠組み）が転換していく歴史として描いた。それは3段階に分けられる。

中世・ルネサンス期（16世紀末まで）のエピステーメでは、すべての物が記号とみなされ、言葉と区別されず、それらすべてが「類似」によって結びつけられていた。

その後に来る近世（17〜18世紀）の近代になって、産業資本主義が発達すると、商品はアジアとかアフリカとかどこかの地域にあらかじめ存在するものではなくなり、人間の労働によって生み出されるものとなった。前の時代には、商品の価値はそれが遠く離れたところにしかないという商品の属性によって決まった。近代においてはそれが労働というありふれた行為の量によって決まるようになった。商品の属性すなわち使用価値と交換価値の分離が明確になった。

商品物を、価値を言葉に対応させて言えば、物の属性に依存していた言葉が、人間の意思や行為に依存するようになった。それが物と言葉のさらなる分離を促した。

30代 それでもフーコーが『言葉と物』を出したとき（1966年）は、今ほどフェイク情報はびこっていないかっただろう。

年金 フーコーがこの著書の結びで「人間は波打ちぎわの砂の表情のように消滅するであろう」（渡辺一民・

エピステーメでは、言葉と物が区別され、物は言葉によって表現されるものとして扱われるようになった。物を結びつけるのは「類似」から「比較」にかわった。

そして近代（19世紀以降）のエピステーメでは、言葉と物との一対一対応の関係の間に主体としての「人間」が介入するようになる。言葉と物の関係が「人間」の欲望に左右されるようになり、両者の分離がさらに進む。

その「人間」もやがて終焉が近いと当時のフーコーは予言した。言葉と物をつなげるものもはやなくなるとのことだ。おそらく現在は言葉と物はその半分以上が無関係に近いところまで離れているのではないか。ラカンが「シニフィアンはシニフィエと何の関係ももたない」（『アンコール』）と言ったように、言葉は物から離れて浮遊し、人びとを捕らえる。フェイク情報が流通する市場ができた。

30代 そういったエピステーメの転換はなぜ起きた。

年金 資本主義の興隆と高度化がそれを引き起こしたと考えるのが私にはいちばん納得しやすい。

中世においては、言葉も物も「類似」によってしか関係づけられなかった。鉄と小麦のような、あるいは上着とコーヒーのような、まるで「類似」していない物どうしが広範囲にわたって大規模に交換される資本主義が未成立ないし未熟だったからだと考えることができる。

近世になると、商業資本主義の誕生によってそれが一変する。遠隔地貿易によって、東南アジアの香辛料、中国の茶、アメリカの砂糖や銀、アフリカの奴隷、ヨーロッパの銃や毛織物など「類似」しない物が広範囲にわたって大量に交換されるようになった。似ても似つかない使い道の商品に同じ値段がつけられ、取引された。言い換えれば使い道と値段が分離された。それが言葉と物の分離を促した。言葉は商品を表す値段のように物を表現するものとなった。

佐々木明訳」と予言した「人間」とは「労働力としての人間」を指しているというのが私の理解だ。

フーコーが『言葉と物』を書いたあと、産業資本主義は終わり、ポスト産業資本主義（消費資本主義）の時代を迎える。産業の牽引車は物を生産する第2次産業から物をつくらぬ第3次産業にかわった。利潤の主要な源泉は

労働力からイノベーションに移った。労働力の担い手としての「人間」は資本主義という舞台の主役の座を降りた。フーコーが「その終焉は間近い」（『言葉と物』）と予言したとおりになった。

産業資本主義の時代の労働は既知の物を対象に既知の手順に従ってやればよかった。ポスト産業資本主義の時代のイノベーションは既知を否定し、未知の何かを求めて未知の手順をさぐりながら進めるしかない。そのため唯一と言っていいツールが言葉だ。まさか！うそだろ！そんな馬鹿な！と否定されそうな言葉を連ねながら未知のアイデアを追う。

そこでは言葉が事実を表しているかどうかは主要な問題とはならない。事実を表すだけではイノベーションの役に立たないどころか、その足を引っ張る。むしろ事実にもとづかない言葉が求められるようになる。デマやフェイク情報が大手を振って歩き回る基盤がこうして形成された。

ニュース日記 957
中村 礼治

フェイク情報がなぜ流通するのか